

令和4年度学校評価報告書 (最終) 【国公立立国立第七小学校】

学校教育目標	中期経営目標 (カッコの数字は経営方針の番号)	短期経営目標	具体的な方策	評価指標	当初	達成状況		成果	課題と解決策	学校関係者評価		
						中間評価	最終評価					
かしこく	○教員の資質向上(2)	①授業を支える授業規律を身に付けさせる。	○授業開始と終了時のあいさつを学年で統一し、指導する。 ○発言をするときは、指名されて「はい」と返事をし、起立して発言させる。語尾までしっかりと言うことを指導する。 ○教師や他の児童の話を書くときは、自分の行動を中断して、話している人の方を見ながら話を聞くように指導する。	A 児童の自己評価と、担任のみとり(発言・態度等)により、クラスの80%以上が、意欲的に学習に取り組んでいる。 B 児童の自己評価と、担任のみとり(発言・態度等)により、クラスの60%以上80%未満の人数が、意欲的に学習に取り組んでいる。 C 児童の自己評価と、担任のみとり(発言・態度等)により、クラスで意欲的に学習に取り組んでいる人数が60%未満。	76% B	85% A	79% B	・年度当初から、各学級を中心に児童に授業規律を身に付けさせることができた。 ・児童の実態に応じた具体的な方策に取り組んだことで、担任による指導がより焦点化され、児童にとっても分かりやすいものとなった。	・当初評価からは伸びたものの、中間評価から6ポイント下がっている。どうしても時間の経過とともに、教師と児童の「慣れ」が徹底につながっている面がある。年度末に向けて、再度徹底して進級、進学に備えていく。 ・授業規律の意義の徹底が必要である。「先生に言われるから」ではなく、自主的に実践できるようにしていく。また、話し方や話の	・多様性のある児童が多い中で授業規律を身に付けている児童が多いと思う。 ・これからの時代、ICT機器は大事なツールであり、使えるようになることは大切なことではあるが、書くことが疎かになって書けなくなると困る。バランスよく両方の面で力を伸ばせるようお願いしたい。 ・基礎学力の向上だけでなく、学習に向かう姿勢や態度についての指導を今後更にお願したい。 ・タブレットの活用が昨年度の児童の姿に比べて、今年度更にできるようになっている。学びの早さに驚いている。 ・「継続は力なり」という言葉があるように、大事なことを継続していけるようにすることが大事だと思う。		
		②学年配当の漢字の読み書きを身に付けた児童を育成する。	○漢字指導の際、成り立ちや使い方、関連して一度に覚えた方がよいものについて教師が意図的に指導し、漢字学習への興味を高めさせる。 ○小テストなどで合格基準を設定したうえで成果確認をし、結果に応じて授業や家庭学習を活用して、繰り返し練習させる機会を設ける。 ○朝学習の時間、家庭学習の機会に、復習を取り入れる。	A クラスの80%以上の人数が成果確認問題の合格基準を達成 B クラスの60%以上80%未満の人数が、成果確認問題の合格基準を達成 C 成果確認問題の合格基準を達成した児童が、クラスの60%以下の人数				69% B	70% B	・各学年や学級の実態に応じた指導を年間を通じて行うことができた。 ・はばたきやきこえとことばの教室と各担任が密に連携を取ることで、支援が必要な児童に対しても、合理的配慮として書く量を減らしたり、宿題のやり方を工夫したりして、個々に応じた調節をできるように心がけた指導ができた。	・漢字テストのためではなく、日常生活の中で既習の漢字を活用できるようにしていく必要がある。 ・タブレット端末の活用によって、漢字への自動変換や音声入力が容易にできるようになり、漢字が苦手な児童への助けになっている面もある。その一方で、実際に自分で文章を書くときに、既習の漢字を使って書くことができるように児童も少しずつ目立ってきている。	・「パワーアップタイム」は、今後も確実に実施し、既習事項の習熟と定着を図っていく必要がある。 ・タブレット端末を活用したデジタル教材の開発について、積極的に取り組んでいく。
		③それぞれの学年で学習する計算技能を身に付けた児童を育成する。	○計算技能を身に付けさせる指導をする際、生活場面等の事象を通して計算の必要性をもたせたり、計算の方法や意味理解について説明させたりするなど、教師が意図的に指導し、計算への意欲を高めさせる。 ○テストなどで合格基準を設定したうえで成果確認をし、結果に応じて家庭学習をさせるなど、繰り返し	A クラスの80%以上の人数が成果確認問題の合格基準を達成 B クラスの60%以上80%未満の人数が、成果確認問題の合格基準を達成 C 成果確認問題の合格基準を達成した児童が、クラスの60%未満の人数						72% B	71% B	・今年度より中高学年で取り組んだ「パワーアップタイム(授業の冒頭5分間に現在の単元に関する既習内容を復習する時間)」が定着してきて、一定の成果が出ている。
やさしく	○人権教育の充実(1) ○生活指導の見直しと徹底(8)	④意欲的に学校生活を楽しく過ごすことができる。	○学校生活や授業、行事を通して、全教員で児童の「居場所づくり」「絆づくり」に意識的に取り組む。  「居場所づくり」…児童に学校が「自分が大事にされ、存在を認識されている」など、自己存在感や充実感を感じられるような仕向ける活動を意図的に設定する。	Q-Uの結果から、学校生活満足群の%の数値と、その全国平均との数値を比べること、1回目と2回目の結果の変容から評価します。	B (2件)	B (1件)	A (0件)					・Q-Uのアンケート結果を基に研修を行い、各担任が結果データを見取り、講習会やOJTなどから児童の実態把握に役立てることができた。さらに、具体的な手立てを学ぶことができた。 ・委員会やクラブ活動だけでなく、今年度は縦割り活動も行い、児童が主体的に取り組む協働的な活動を充実させることができ、日々の児童同士のトラブルに対しても、教職員で共有し、組織的に対応することができた。
		⑤仲間外れや相手の嫌がる言葉遣いなどのいじめの件数の減少を図る。	○学期に一回担任との全員面接を実施し、児童の実態把握に努める。 ○全教職員が児童のちょっとした変化を見逃さずいじめの未然防止に努める。 ○日々の児童同士のトラブルは即時解決を図り、トラブルを乗り越える力も児童に身に付けさせる。	A 対策委員会を開く案件(第一報を提出する案件)が0件 B 対策委員会を開く案件(第一報を提出する案件)が3件以下 C 対策委員会を開く案件(第一報を提出する案件)が4件以上								
		⑥自分を大切にし、自分に自信がもてる児童を育成する。	○保護者と必要に応じて連絡を取り合い、児童のよさや、つまずきを共有し、「励ますポイント」を共有して児童に自信をもたせるようにする。 ○教室での様子や授業中の発言には、価値付けをするような褒め言葉を用いて、自己肯定感を高めている。	Q-Uの結果から、「Bいごちのよいクラスにするためのアンケート」の承認得点と、「Aやる気のあるクラスをつくるためのアンケート」の学校生活意欲の数値で見取り、1回目と2回目の結果の変容から評価します。				(5月実施) 承認得点 80% 学校生活意欲 31.2% 学校生活意欲(全国) 30%	(10月実施) 承認得点 78% 学校生活意欲 30.7% 学校生活意欲(全国) 30%	・Q-Uのアンケート結果を基に研修を行い、各担任が結果データを見取り、講習会やOJTなどから児童の実態把握に役立てることができた。さらに、具体的な手立てを学ぶことができた。 ・自己肯定感を高めるための具体的な実践を、各学年の実態にそって実践することができた。	・全国の平均よりは高い数値であった。2回目は承認得点と学校生活意欲の両方とも、若干の数値の減少があった。承認得点が、学校生活意欲に密接に関連していることが分かった。 ・目標に向かい、学校だけの取組とするのではなく、各家庭と協力し合って児童に働きかけていく。	
げんきよく	○心と体の健康教育の充実(5)	⑦すすんで挨拶ができる児童を育成する。	○まずは、「自分から挨拶」が達成できるように、共通した掲示物を利用して指導する。 ○教職員が率先して挨拶を児童に行い、模範的な姿を見せる。	A 90%以上の児童が身に付いている B 80%以上90%未満の児童が身に付いている C 身に付いている児童が80%未満	83% B	87% B	86% B	・教職員が率先して挨拶を行い、児童に模範的な姿を見せることができた。 ・生活指導だけでなく、授業で取り上げるなどし、挨拶の大切さについて考えさせることができた。	・評価としてはBで当初と変わっていないのが現状である。 ・生活目標を活用するなどして、児童の挨拶ができていく姿を、教職員がもっと意図的に褒め価値付けていく。			
		⑧基礎的な体力向上における課題克服のための取組に努める児童を育成する。	○感染防止策を講じた運動や遊びを推奨し、短縄月間の取り組みを充実させる。 ○昨年度の東京都の体力テスト結果を分析し、とくに苦手な種目について、特化した改善への取り組みを実施する。 ※1年生は今年度の体力テスト結果が返却され次第評価を行う。それまでは、体力テストの各種目のやり方について指導を行う。	A 運動や遊び、短縄週間取り組みや、自己の課題の克服に向けて意欲的に取り組んでいる児童が90%以上 B 運動や遊び、短縄週間の取り組みや、自己の課題の克服に向けて意欲的に取り組んでいる児童が70%以上90%未満 C 運動や遊び、短縄週間の取り組みや、自己の課題の克服に向けて意欲的に取り組んでいる児童が70%未満				60% C	79% B	・短縄週間の取組により、全校児童が積極的に外に出て運動する姿が見られた。また、教職員が率先して声をかけたことも要因と考えられる。 ・朝の時間の元気UPタイムも楽しく運動する大切さを実感させることにつながった。	・体力テストの結果に基づいて、各学年体育の帯の時間で行う運動に引き続き取り組んでいく。 ・クラス遊びや元気UPなどを活用して、体を動かすことの楽しさを引き続き伝えていく。	・コロナ禍による影響で運動不足の児童も多そうだが、学校での縄跳びや元気UPタイムによる取組の工夫などで児童が積極的に運動する姿が見られるようになって良かった。今後も体力向上に向けて取り組んでほしい。
		⑨新しい生活様式を自らすすんで取り組み、自分の身は自分で守る児童を育成する。	○教室移動時の整列時や、授業における集合時などの場面で、常にディスタンスをとるよう指導を繰り返し、スタンダードにしていく。 ○手洗いの仕方や休み時間の過ごし方等の生活様式に関する注意事項について、まずは教職員での共通認識を図る	A 90%以上の児童が身に付いている B 80%以上90%未満の児童が身に付いている C 身に付いている児童が80%未満						84% B	90% A	90% A